

現代日本文学の最前線を 公平な目でいち早く紹介



文化創造学部表現文化専攻
助教授
清水良典

【学歴】
1976年3月 立命館大学文学部文学科日本文学専攻卒業
【職歴】
1976年4月 愛知県立小牧工業高校教諭
1995年4月 愛知淑徳短期大学国文学科専任講師
1996年4月 愛知淑徳短期大学文芸学科助教授
2000年4月 愛知淑徳大学文化創造学部助教授
(現在に至る)
【受賞】
1986年 第33回群像新人文芸賞評論部門
1993年度 名古屋芸術奨励賞

私は学外では、文芸評論家」という肩書きも名乗っているが、作家や詩人に比べると、文芸評論家は何をしているのかよく分らないといわれる。簡単にいえば新聞や雑誌で文学関係(主に小説)の書評や論評を担当している仕事であるが、同じ文芸評論家でも時代小説の専門家もいれば推理小説・ミステリーの専門家もいる。私の場合は現代日本文学の最前線の作品に関心があつて、新しい文学の動向をいち早く人々に紹介するのがもっぱらの仕事である。そんなふうになったのは、16年前に講談社の「群像新人文芸賞評論部門」を受賞したのがきっかけであり、また共同通信で一九九〇年代の8年間「文芸時評」を担当し、朝日新聞で3年間書評委員を担当してきた結果である。最近出版した『笹野頼子 虚空の戦士』(河出書房新社)も、かねてより注目してきた現代女性作家についての評論をまとめたものである。

清水先生の専門は近代文学、文芸評論、文章表現指導。書評を日経産経などの新聞や週刊朝日、論座、オブラなどの雑誌に発表するほか、中日新聞でエッセイも連載しています。
名古屋を基盤に活動する評論家といふのは珍しいのですが、笹野頼子、川上弘美、町田康、柳美里などが現在、旬の作家をデビューし、公平な批評を聞ける評論家として指導する文芸を評価するときの共通のポイントは、文体、清水先生が小説や文章講座などで指導する文芸を評価するときの共通のポイントは、文体、文章としての独創性や存在感を重視するそうです。そういう視点から文学を見直したい、現在はこの春発行の「純文章」読本(仮題)「ちくま新書」の執筆に取りかかっているとのこと。



【最近3年間の著作リスト】
「最後の文芸批評」(四谷ラウンド)1999年(単著書)
「文学がどうした!?」(毎日新聞社)1999年(単著書)
「高橋たか子の風景」(彩流社)1999年(共著書)
「三島由紀夫の表現」(勉誠出版)2001年(共著書)
「谷崎潤一郎必携」(学燈社)2001年(共著書)
「村上春樹がわかる」(朝日新聞社)2001年(共著書)
「笹野頼子 虚空の戦士」(河出書房新社)2002年(単著書)

もとも若いころから私は小説を書いてきた。しかし大学時代には近代文学を専攻して、谷崎潤一郎を研究し、卒業論文も谷崎論だった。そして評論家となるきっかけとなった群像新人賞を受賞したのも、記述の国家 谷崎潤一郎原論」という論文だった。その意味では、谷崎研究者の末席にも連なっている。

それから私には、もう一つの顔がある。文芸評論家としてデビューしたのと同じように、高校生

のための文章読本(筑摩書房)という共編著を、高校の国語教師時代の仲間と作って、それが現在もロングセラーとなっている。高校で「国語表現」の授業を、仲間と共同討議しながら行なったのがきっかけで、創造的な作文のカリキュラムを作ったのである。現在ではそれを土台に、本学で、クリエイティブ・ライティングを教えているし、各地の市民講座やカルチャーセンターでも文章講座を受け持っている。



「名古屋十話(とわ)」
文化創造学部教授
矢頭純(共著)・梅原猛、豊田章一郎、城山三郎、黒川紀章ら10名の執筆
A5判/253ページ/中日新聞社/
1,600円/2002.10.15発行
日本の中核的地域にある都市、名古屋。哲学者、経営者、作家、建築家ら、さまざまな立場の10人が、歴史、経済、生活など各方面から名古屋論を展開、その独自色と将来への期待を論じた。筆者は、明治らしい地元新聞に掲載された、名古屋に深くかかわる大ニュースを抄録した。



「ウィズダム英和辞典
井上永幸・赤野一郎編」
文化創造学部助教授
中郷慶(項目執筆・校閲)・発音校閲)
B6変型判/2,368ページ/三省堂/
3,100円/2003.1.10発行
日本人英語学習者のために作られた独自のコーパス(大規模英語データベース)を全面的に活用した初の英和辞典。項目選定、語義解説、用例、語法解説などすべてが英語の実例分析に裏打ちされた詳細で生きた情報。コミュニケーションにすぐ使える発音型辞書。総収録項目数約9万2千。



「学習経験と大脳半球機能差に関する研究」
コミュニケーション学部助教授
吉崎一人
A5判/183ページ/風間書房/
7,500円/2002.12.15発行
ヒトの大脳は左脳と右脳にわかれており働きに差があることがわかっている。本書はこの左右大脳半球機能差が、学習経験の多寡や学習内容によって変容することを心理学的な実験によって明らかにしている。またこれらの知見から新しい「大脳半球機能差」観について論じている。

Academic Library

著書紹介

著者自らが
近刊を紹介します。

随想

本学の「学生への企業 紹介プロジェクト」に 期待

現代社会学部現代社会学学科
教授 石田好江



この春卒業したゼミ生たちと久しぶりに会うことになった。男子卒業生の大半は夕方7時から9時の一次会には間に合わず、全員が揃ったのは10時半をまわっていた。どの企業も不況下の人手不足による慢性的な残業が続いているようで、彼らの話の端々に、仕事の面白さも分らないままに、残業だけを強いられることへの不満や不安が窺われた。

旧労働省の調査では、就職して3年以内に離職する割合が卒業生3割に上っていることが報告されており、その背景として上記のような不況による就業環境の悪化も指摘されている。また、文部科学省の学校基本調査によれば、平成14年度の新規大卒者のうち、大学院等への進学者は10.9%、就職者は56.9%アル

バイト等の1年未満の仕事に就いた者は4.2%、就職しなかった者は21.7%つまり大学新卒の4人にひとりがいずれフリーターか未就業という状態になっている。しかも、厚労省の調査では、失業経験者は失業を繰り返す傾向にあること、フリーターに長く留まると正社員への道が開けないことが指摘されている。

これまで若者の雇用問題は、扶養家族を抱える中高年ほどには深刻視されてこなかったが、ここに来てやがと日本社会の将来に重大な影響を及ぼす問題であることが認識されるようになった。しかし原因については、依然、豊かな社会や若者の価値観の変化・就業意識の問題にあるという見解が大勢である。果たしてそうだろうか。価値観の変化

はここ3年以内に起ったことではない。近年起っている若年雇用問題の最大の原因は、やはり長期不況なのである。未就業者の増加は就業機会の減少によるものであるし、離職者の増加は、不本意就職や長時間残業等の就業環境の悪化によるものなのである。そこを見誤ると事態は改善できないことになる。したがって、求められる対策は、就業規制とともに、労働市場自体に踏み込んだきめの細かいものということになる。その意味で、本学が今年9月に就職幹旋会社と提携してスタートさせた「企業紹介プロジェクト」は大いに期待できるものである。いま求められているのは、学生と企業を具体的に結びつける仕組みなのである。